慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	長谷川安兵衛著 予算統制の研究
Sub Title	
Author	山田, 正夫
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.12 (1930. 12) ,p.1987(115)- 1990(118)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19301201-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

就いては財界豫測に關する研究の發展と關聯せる資金運用上の極めて興味ある問題が含まれてゐるし、又經費豫算の算出には原價計算との密接なる關係を考慮に入れる必要があるのであつて、更に明瞭に言及せらるゝことなかりし見積財政表の研究と共に、これ等すべてを一應論述するに非ざれば、豫算統制の豫算統制たる本領を傳ふるに足らぬ樣に思はれるのである。著者は專らブルエール及ラザラス兩氏共著の『應用豫算論』に依られたるものゝ如くであるが、評者の解する限りに於いては同書は必しもマッキンセイ氏によつて完成せられたる完全な意味に於ける豫算統制を取扱へるものと思はれない部分があるのであつて、銀行業に對する豫算統制の應用こそ其の原價問題以上に今猶ほ實施研究の楷梯を踏み出したばかりの樣にも考へられるのである。而も銀行の豫算統制たる必ずや將來大いにその効用を認めらるる機運の到來すべきことあるは疑ない所であるから、敢て此處に私見を披瀝すると同時に、銀行豫算制度の紹介に先鞭を附けられたる本書の著者に對つて其の研究の完成を期待せんとすることは、必しも望蜀の譏を蒙るべき限ではあるまいと思ふ。

以上本書の內容に對する卑見を縷述したが、その最大の特色が多く前人未踏の境地を勇敢に開拓せんとしたる點に存することは再三繰返して述べた通りであつて、著者の努力は必ずや學界に於いても實際界に於いても極めて尊重せらるべきものたることを信じて疑はない。銀行會計に志す人士が、一般銀行簿記會計に關する諸種の書籍の外に必ず一應の繙讀研究を欠く可からざる良書として、これを江湖に薦め得ると思ふ。（菊版布裝　横組二二一頁　一圓八十錢　昭和五年十月　東京　森山書店發兌）

長谷川安兵衞著『豫算統制の研究』

山田正夫

四六版百二十頁の小冊子ではあるが、本書は獨立した單行本として豫算統制を取扱つた我が國最初の著述である。

凡そ企業の經營的活動は、多かれ少かれ常に將來に對する見越乃至は豫定を必要とする。從つて企業の豫算、例へば製造の豫定、仕入の見積、賣上の豫想等々が決して新しい試みでないことは、何人も容易に首肯する所であらう。併しながら豫算統制は全く新しい一個の制度として、近年漸く經營上に重要な地位を認められようとしてゐるものである。蓋し企業組織が膨大な型態を取り、經營規模が複雜の程度を增して來るに伴れて、從來行はれて居た樣な局部的な、而も極めて不確實な豫測推斷を以つてしては、到底滿足な効果を收め難くなるに至つたと同時に、又一方會計組織、企業統計、市場分析、景氣測定、その他の管理經營上に於ける科學的研究の發達は、經營職能の協調若くは統一的意志に依る統制に對する必然的要求と相俟つて、其處に一個の全體的、包括的な豫算組織を生むことになつたのである。だから多くの論者は豫算統制の觀念が決して新しいものでないことを指摘したり、國家豫算制度の企業への適用であると解釋したりしてゐるが、吾々はそういふ見方が決して豫算統制の本質を語るに足るものでないことを認むると共に、提唱實施を見るに至つて以來僅か十年になるかならぬ此の統制組織に關する研究が、極めて重要な意義を持つことを知らねばならない。寔にそれは、啻に產業の合理化乃至は企業經營の統制化に對して缺くべからざるもの

たるのみに止まらず、所謂計畫經濟の研究に對しても有益な暗示を齎らすべきものと考へられるのである。

豫算統制に關する文獻は、漸くその實施期に入つたアメリカに於いては相當多數に公にされてはゐるが、その多くは會計乃至經營關係の著述の一部に包含されたものか、若くはパンフレットの型式に依る部分的研究乃至報告に限られてゐて、その全豹を窺知せしめるに足るものとしては先づ一九二二年に現れた McKinsey 氏の大著に指を屈する外、僅かに二三の好著を算へ得るのみに止まり、アメリカとは反對に實施に先立つて理論的研究の上に比較的大なる發達を遂げたドイツに在つても、これが體系的論述といひ得るものは一九二八年に出版された Lahmann 氏の一書を措いて、他に見るべきものゝない有樣である。我國に於いても同樣に其の研究は學界乃至一部實際界の先覺者に依つて次第に注目を惹き、これに關する論述の屢々發表せらるゝを見る狀態に入りつゝあるが、今長谷川教授に依つて其の全般に關する纒まつた一本が江湖に提供されたことは、誠に慶賀に堪えぬ所である。蓋し豫算統制の必要なことは今更云ふまでもないことであるが、これを實施せんが爲には、殊に我國の如く企業經營に關する科學的研究の發達が幼稚な所に在つては、種々な障害や困難に遭遇し、その結果實際家をして動もすればその採用に逡巡を感ぜしめ、其の効益に疑惑を懷かしむる懼なしと爲し難い。從つて我々は何よりも先づその本質と實施の方法とに就いて愼重な研究を積まねばならぬのであつて、その爲には各方面よりする部分的特殊研究を益々深くしなければならぬのはいふまでもないが、其の際常に顧みて忘る可からざることは斯かる特殊豫算問題の研究が全體としての豫算統制に綜合統一せらるべき性質のものたることに歸着する。即ち豫算統制の基礎概念の要求せらるゝ所以は玆に在り、長谷川教授の勞作の最大の意義を、吾人は此の點に見出したいと思ふのである。

本書は既述の如くその頁數こそ少いが、豫算統制の全野を簡潔に要領よく記述し、而も最近の資料文獻を相當豐富に採り入れて居る點に於いて、誠に手際の良い出來榮えを示してゐる。恐らく頁數に制肘せられた爲らしいが、各種豫算の編制に關する最後の一章が少しく簡單に過ぎた嫌なきことを得ぬのは、販賣豫算に就いてはクォータの解說まで試みる周到さを示されたるに對して、些か均衡を欠く思ひあらしむる所以であるが、その半面かゝる技術的方面を離れた豫算統制の本質を取扱つた前半には、理論的研究に對する興味ある暗示を與へられたものとして、就いて聞くべき所論の存するを見るのである。從つて今此處では局部的な評者の感想は全然除いて、豫算統制の本質に對する教授の所說を簡單に傳へるだけで本書の紹介に代へようと思ふが、それに先立つて一應本書の內容を各章の題目に依つて示せば左の如くである。

會計學の近代的革命、豫算統制の進展と現狀、豫算統制の本質、豫算統制の効益と適應性、豫算統制の前提要件、豫算の編成（その一及びその二）以上本論全七章。附錄豫算統制に關する參考文獻。

本書の第一章第三節に題して著者は『豫算統制は會計學なり』。と言明してゐる。これは米獨の學者の大多數が略同樣の見解を持するものとみて差支へない主張であるし、私も敢てそれに異論を挿まうとは思つてゐないが、然らば更に進んで豫算統制とは何ぞやといふ疑問を提起して著者の所說を檢すると『それは云ふ迄もなく豫算――一種の將來の活動を支配する未來勘定表――と呼ぶ活動の目標を樹て、この豫算遂行のため各部門をしてその活動を協調、調和化して目的達成に努力せしむるものである。……そこで筆者は豫算統制を以つて、豫算を通しての統制原理を企業の全活動に應用し、これに依つて末來の企業活動を指導統制する制度なりと云ひたい。』（三三―四頁）との定義

に依つて其の回答が與へられるのである。果して然らば豫算を以つてする企業活動の指導統制が直ちに會計學と云ひ得るであらうか。豫算統制の科學的基礎に關する最大の難關は此の點に潜んでゐる。そしてそれは又同時は晩近會計學上の一つの大きな問題でもあるであらう。

アメリカに於ける科學的管理經營の進歩、ドイツに於ける經營經濟學の發達は、經營に關する研究と會計に關する研究とを一層緊密に結合せしめて、會計學を以つて經營經濟學の一分課たらしむると同時に、會計に依る經營の統制管理、若くは經營經濟的會計の重要なことが强調せられ、會計學は今や將に廣大な新領域の獲得開拓に向つて進み入つたかの觀がある。斯くの如き基礎概念の發展は寧ろ當然のことゝして吾人のこれを受け容るゝに敢て躊躇せざる所であるけれども、又一面斯かる傾向は、動もすれば經營的職能を過重視するの結果、會計學の本領を曖昧ならしめんとする樣な謬想に導き易い。此處でその詳細を論ずべき餘地はないが、畢竟するに私見を以つてすれば、會計學は管理統制の制度に關聯を有するものでないと共に、又直接經營管理の制肘を蒙るべきものでもないと云はねばならぬ。即ち吾人が長谷川教授の理解せらるゝ如き豫算統制を以つて、これを會計學と稱し得るや否やに一應の反問を呈したい所以である。

併しながら其の解決を見るまでには猶ほ幾多の研究が、經營經濟的見地からも、會計學的見地からも、重ねられねばならぬことゝ思ふ。如上の卑見は、本書批評の機會を利用して少しく豫算統制の研究に關する根本問題の一端に觸れたまでゞあつて、勿論これを以つて一個の欠陷とし、本書の價値を傷けるものと爲すは著者を誣ふること嚴に過ぐるものと云ふべきであらうか。

既述の如く本書は生成發展の過程にある豫算統制に關する好個の、且つ唯一の參考書である。これだけで既に本書の價値を語るに十分な筈である。（四六版布裝百二十一頁。八十錢　昭和五年十月　森山書店發兌）

前號（第二十四卷第十一號）目次

◉英國綿業に於ける家内勞働者（綿業に於ける産業革命序説三）　野村兼太郎
◉史的唯物論研究序説　加田哲二
◉英蘭教區徒弟制度管見　高村象平
◉カッセルの自由主義經濟學　飛賀健三

●一冊定價金五拾錢　郵稅金壹錢五厘
●半ヶ年分金貳圓九拾錢
●一ヶ年分金五圓四拾錢　郵稅共
●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限
昭和五年十一月二十日印刷納本
昭和五年十二月一日發行
毎月一回一日發行
三田學會雜誌　禁轉載
第三十四卷第十三號
東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内　編輯兼發行者　江田範保
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　印刷者　金子鐵五郎
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　印刷所　金子活版所
發賣元　丸善株式會社三田出張所　東京市芝區三田貳丁目壹番地　電話高輪一九二六番
●尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
發行所　東京芝三田慶應義塾内　理財學會